

特集 私の「英語教育論」

# 中学英語からの卒業

## ～高校英語教育のTop Priority～

東京学芸大学名誉教授 金谷 憲

### 高校英語教育のTop Priority

学校英語教育のtop priorityは、基礎力の定着である。小中高すべてを挙げてこの目標実現に取り組まなければならない。既に、2000年にはこの目標設定についてELECがCrossroad Projectで政策提言を行っている。詳細は、参考資料を参照していただきたいが、この提言では、中高6年間で中学英語をマスターすることを目標にかかっている。そして、それ以上に英語を必要とする人については、それなりに学習できるようにするとして、学校英語では、中学英語からの卒業を必ず実現するためにあらゆる努力をすとしている。以下にこの目標を軸として私の英語教育論を展開したい。

「何年も習っているのに使えない」というのは、大昔から繰り返されている日本の英語教育への批判である。中高6年（今後は小学校が加わる）も習っているのに簡単な英語が聞き取れない、短く単純な英文を発することができない、つまり「使えない」というのである。

使えないのは多くの場合、基礎力が定着していないからだと思ふ。ここでの英語の「基礎」とは、中学で習う英語のことである。

中学英語が出来ないと考えるか、大丈夫だと考えるかによって、高校英語教育の課題が変わって来る。もし、基礎が大丈夫であると考えれば、問題はその先である。高校ではより高度な表現の獲得、達意の文章を作成する力、説得力のあるスピーチをする力、丁々発止と議論できる力などに課題を求めることになる。

しかし、現実はそのようではない。中学を卒業した生徒であっても、中学英語はまだ卒業していない生徒が大多数である。文科省の中学全校調査(2011)でも、中学卒業時に英検3級を取得、または受験すれば取

得できると考えられる生徒は全体の25.5%である。私は仲間と10年間以上、中学生の主語把握プロセスを調べているが、中学卒業時で主語となる名詞句がちゃんと把握出来ている生徒も、偶然に上記文科省調査とほぼ同じ3割程度である(詳細は金谷編(2015 予定)参照)。これでは、基礎は大丈夫とは言えない。

英検3級を取得していても、中学英語を自由に駆使できるとは限らない。私の考えでは「定着」している状態とは、中学英語が自由自在に操れるということを意味する。語彙は別として、中学の範囲であれば聞いて直ぐ理解し、即座に応えることもでき、この範囲の読み物であれば、そこそこのスピード(150～200WPM)でザッと読んで、大意を把握出来る、などなどである。

具体的にイメージした方がよいので、単純な課題で考えてみよう。次のようなことを高校生が出来るかどうか、考えてみてほしい。下記は、中学検定教科書3年用のThe Story of Sadakoの第1パラグラフである。各センテンスを生徒に聞かせて2～3秒おいて、repeatさせる。あるいは、印刷されたものを生徒に配って、1センテンス毎に短時間(数秒)黙読させて紙を伏せてそのセンテンスを書かせる、といった活動をイメージしてほしい。

It began with a flash. On August 6, 1945, an atomic bomb was dropped over Hiroshima. The bomb destroyed the city. At least 130,000 people died by the end of the year. But two-year old Sasaki Sadako survived.

(p. 40, NEW CROWN English Series 3, 三省堂)

どうだろうか。高校生は出来るだろうか。また、the Story of Sadakoの文章全体(上記のパラグラフの約5倍)を上記した「そこそこの」スピード(150

～200WPM)で読み終わり、大意把握ができるだろうか。

実際のコミュニケーションはこうした活動よりずっと複雑で難しい。したがって、今ここに例示したような活動が出来なければその先は無理ということになる。

高校の先生方は、中学英語を持ち出すと、「それは中学の英語教師に言え。われわれは高校で教えているのだ」と言いそうである。しかし、中学英語の定着は中学段階だけでは本来無理である。言語の習得には導入時から多くの時間を要する。中学で「わかる」ところまで行っても、「使える」まで行くのは高校入学以降のことである。中学英語の定着は高校の仕事でもある。

「高校では新たに導入される文法事項などがあるし、大学入試があるので中学などに構ってられない」という声が聞こえてきそうである。しかし、どんな事情があるにしても、土台が出来ていないところへ、新しいものを乗せようとしても、無理である。土台が出来ていないところへ柱を立てようとしても、柱は立たない。柱がちゃんと立っていなくては屋根を葺くことはできない。

大学入試にも土台が必要である。大学入試問題に解答するにあたって、中学文法で大体解けるとい調査結果もある。アルク教育総研レポート(2015)によると、語彙がすべて分かっているという前提で、中学文法のみで解答できる問題は79%、ちょっと機転を働かせるとできる問題を含めると89%ということである。中学英語が、いかに大切かがわかるだろう。

### 定着には「重ね塗り」と「発表」

高校で中学英語定着のためにやらねばならないことは、「重ね塗り」と「発表活動(production)」である。「重ね塗り」とは漆塗りのように、下塗りから何度も上に塗り重ねていって完成するような過程をイメージしていただければよいと思う。

ごく常識的に言って、一度だけ習えばそれ以後絶対に忘れないといった人はいたとしても、例外中の例外だろう。しかし、多くの高校の授業では、1度授業で扱った課は2度と扱われない。1度使った教材は2度と使われない。これで、習ったことは身につくだろうか。

習ったことを学習し直して、定着をより強固にしてゆくことが絶対必要である。その場合、1回目とまったく同じことを繰り返すのではない。1回目がパート毎の精読で内容を掴んだとすれば、2度目は1課分通して読んで英問英答で理解をみるなどの方法をとる。逆でも良いわけで、1回目は大雑把に読んだので、2回目、3回目は精読でも構わない。「繰り返し」という言葉ではなく、「重ね塗り」というやや馴染みの少ない言葉を使わせていただいたのはこのためである。

学習に目的を設定することも必要だ。発表活動を学習のゴールにすると、生徒たちの真剣みが違ってくる。「重ね塗り」をさせても生徒は飽きることはない。

### 「重ね塗り」と「発表」へのとり組み

「重ね塗り」と「発表」が大切ということに賛同いただけても、実際に高校の授業内にこの2つの要素を取り入れるのは、容易なことではない。重ね塗りをするにはそれなりの時間がかかるので、全体量を減らさないと出来ない。発表活動にはもっと多くの時間がかかる。したがって、まず、時間を絞り出す必要が出てくる。教室で扱う事項の取捨選択が必要になるし、適切な教科書の採択も必要になる。教科書が難しいと意味理解に授業時間を使い果たしてしまうし、難しい内容を英語で表現することも到底出来ない。

こうした障害を乗り越えて、重ね塗り、発表活動を可能にしようという取り組みは各地で行われ始めている。ここでは、私が直接関係している2例だけをご紹介します。

### 山形スピークアウト方式

この方式は、6年前に山形県立鶴岡中央高校でスタートした。まだ、旧カリのころである。スピークアウト(以下SO)という学校設定科目を作る。この科目では、高1で使った英語Iの教科書のいくつかのレッスンを高2でも使い、復習してから何らかの発表活動(role play, skit, debateなど)まで行うというものである。

高1の時に8時間ほどかけて、主に内容理解までたどり着いているレッスンに、2年のSOで更に7、8時間かける。例えば、animal therapyについて高1

で読んだら、高2ではanimal therapy clinicの職員と患者のrole playを最終ゴールとして、復習や発展練習を行う。手塚治虫について英語で学んだら次の学年では、手塚治虫に生徒が扮し、他の生徒が聞き手になってトーク番組を作るなど、発表活動を最終目的に、前年度習ったレッスン内容を復習するというものである。高2、高3でも同じ方式を使う。つまり、高2の英語Ⅱの教科書を使って、高3のSOで同じように発表活動を行う。

この結果、鶴岡中央高校では、生徒たちは英語を書いたり、話したりすることに抵抗感がなくなり、外部模試の成績も、1年から2年よりも2年から3年にかけての伸びが大きい傾向にある。また、英文の読み方なども、重要な情報を探すなどといった工夫を生徒自らすることが観察されている。

鶴岡中央高校では学年設定科目を利用しているが、科目を新設するのは一般的に容易ではない。この点を改善したのが同じ山形の県立山形西高校である。こちらでは、夏休み、冬休みなどの講習や年度末の期間を利用してSO活動を行う。鶴岡中央高校が6年取り組んでいるのに対して、こちらはまだ3年目を終了したところだが、SO第1期生(2015年3月卒)の成績は、外部テストでもセンター試験でも有意な伸びを見せている。SOの汎用モデルとして他の学校が真似しやすい形だと言える。

### 田名部方式

学年をまたいだり、同じ年度であっても一定のインターバルを置いて、重ね塗りをを行うのが山形SOであるが、一気に発表活動まで持って行く取り組みも行われている。

こうした取り組みで注目されるのが青森県立田名部高校の方式である。全てのレッスンで重ね塗り、発表をやらせていては時間がかかりすぎる。そこで、田名部高校では、レッスンによって扱い方に軽重をつけることにした。これが田名部方式の基本コンセプトである。コミュニケーション英語で、教科書のレッスンを「こってりコース」と「あっさりコース」に分ける。これを更に2つずつに分けて、「超こってり」は15時間をかけ、最後にはperformance testを行う。「普通のこってりコース」は10時間をかけて発表活動をゴールとし、performance testは行わない。これに対して、「あっさりコース」は、4時間コースと

2時間コースに分かれる。授業では、その場でザッと全体を読んで簡単な質問に答える、全体を聞いて内容チェックの問題に答える、などと簡単に済ませてしまう。

このようにメリハリをつけることで、繰り返し練習の機会と発表の機会を確保するとともに、軽くではあるが、教科書のレッスン全部を扱うことが出来る。Performance testの実施も学年で複数回実施することが出来る。

### 「重ね塗り」「発表活動」へ舵を切るために 学校では

高校での「重ね塗り」「発表」を実現するためには英語科全体で取り組む必要がある。山形や青森での取り組みは、個々の教師が単独で行うことはできない。学校設定科目を作るには当然、英語科全体はもちろん、学校全体の同意が必要である。田名部方式を採用するにも、同じ科目の複数の担当者で「あっさり」と「こってり」が同じでなければ共通の定期考査を行うことは出来ない。

学校で取り組むためには当然、話し合いが必要である。学校現場が年々多忙になっていることを考えると話し合いを持つのはなかなか難しい。しかし、相談しなければ新しいスタートを切ることは出来ない以上、どうにかして話し合いの場を作ることが必要である。

話し合いの場を設けるのが第一の関門であるとすると、第2の関門はその話し合いの場を、自由に自分の意見をぶつけ合える場にすることである。仲間内の議論ではいろいろなことを想い、どうしても本音で勝負出来ない。しかし、自由に話し合うようにすることが改革実行のキーになる。私の経験でも、成功した学校は例外なく自由な話し合いが可能になっている。

英語科内に良いリーダーがいれば良いが、そうでない場合には外部アドバイザーなどの利用が役立つ。外部の人間が入ると、人間関係の構造が変わって話し合いやすくなる。また、外部の人を入れておくと、話し合いの機会が存続する確率が高くなる。内部の人間だけだと、さまざまな学校の事情により、機会を中止したり日程を変更したりしている内に、会の開催が億劫になってしまい、話し合いの機会が自然消滅することが多い。

### 国、地方自治体(教育委員会)では

重ね塗り、発表の機会を確保するためには、もっと大きな単位での解決策も必要となる。国のレベルでは、学習指導要領の作り方を変えて行く必要がある。現在は、小中高それぞれの段階でどう指導すべきかの大綱が示されているだけだが、学習指導要領自体に重ね塗りの発想を取り入れることが求められる。例えば、中学で導入された事項をその後どのように展開してゆくかといったことが、学習指導要領に組み込まれる必要がある。

教育委員会レベルでは、現職研修についての工夫をすべきである。校内研修によって、授業を変えて行くことをしなければならぬ。教師の多忙化とも併せて考えると、学校外に教員を集めて研修を行うのは徐々に難しくなっている。むしろ、指導主事やその他の外部人材を学校に派遣して、頻りに話し合いを持ちながら、その学校の授業改革を推し進めるようなスタイルが望ましい。文科省や自治体が現在行っている拠点校方式が有望ではないか。拠点校を研究の中心として、そこで得られた研究成果を地域全体、県全域に広めて行く方式である。

また、拠点校は研修のセンターとしても機能するので、初任者を拠点校に配置して、教師としてのキャリアの早い内に、学校ぐるみの改革を経験させると

〈参考資料(文献・DVD)〉

ELEC (2000) Crossroad 政策提言 [https://www.elec.or.jp/teacher/crossroad\\_jp.html](https://www.elec.or.jp/teacher/crossroad_jp.html)

文科省(2011)『『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1318780.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1318780.htm)

金谷憲編著(2012)『高校英語教科書を2度使う!山形スピークアウト方式』アルク選書

高橋貞雄他(2013) *NEW CROWN English Series*, 三省堂

金谷憲監修(2014) DVD『教科書を2度使う!山形スピークアウト』ジャパンライム

アルク教育総合研究所(2015)アルク英語教育実態レポートVol. 2 <http://www.alc.co.jp/company/report/>

金谷憲他(2015 予定)『中学英語いつ卒業? ~中学生の主語把握プロセス~』三省堂

良いと思う。首都圏のように採用者数が多いところはなかなかうまく行かないかもしれないが、その他の道府県になると幸か不幸か初任者は多くない。そういう場合には、限られた数の拠点校に配置する余地はあると思う。

### 結び

使える英語が身につかない、というのは日本人が長らく持ち続けている不満であり、裏返せば「使いたい」願望の強さを示している。使えないことの原因はたくさんある。解決策はいろいろな形で提案されている。昨今でも、「英語の授業は英語で」、「大学入試にTOEICを」、「論理的思考をせよ」等々の議論がなされている。それぞれに傾聴に値する部分を含んでいるが、根本的課題から目を背けている嫌いがある。派手な方策に目を奪われ、基礎を培うという地味な仕事を諦めてはいないだろうか。

もっと常識に立ち戻り、そして勇気を出して、基礎をどのようにしたら身につけることが出来るかを具体的に試して行くことも考えるべきである。1度習っただけでは身につかない。直ぐに使うつもりもないスキルが身につくわけがない。英語教育の基本的な課題に粘り強くチャレンジすることこそ、年々の不満を解決する策であると私は確信している。

